

# いせはら未来会議・光風会 合同視察報告書

実施年月日

令和4年 8月 8日～10日

調査場所及び調査項目

札幌市 8日

「札幌市子ども発達支援センターちくたくの運営」について

東川町 9日

「ブランディングを活かしたまちづくり」について

石狩市 10日

道の駅石狩「あいろーど厚田」について

参加者

相馬 欣行、安藤 玄一、橋田 夏枝、越水 崇史

## ○札幌市「札幌市子ども発達支援センターちくたくの運営」について

### 1、視察目的

札幌市子ども発達支援センターは、お子さんの身体や心の発達、情緒面や行動面の問題に対して、医療・福祉の一元的な支援を目指すために、複数の施設が集まった複合施設を運営されています。児童精神科・肢体不自由児などを対象にした小児科、整形外科を持つ医療部門に加え、児童心理治療施設、福祉型障害児入所施設の入所部門、就学前のお子さまのための通所部門として、児童発達支援センター(医療型・福祉型)があり、それぞれの部門が協働しながらひとりひとりのお子さんに対して、必要な支援を推進していると考えます。

本市でも障がいを抱える子どもが増える現状に於いて、今後の設置の在り方や運営について学び、次期総合計画に反映をめざしたい。

### 2、調査概要

#### (1)これまでの経過

- ・昭和9年精神科病院でスタートし、平成27年に現在の運営形態になった。
- ・発達支援について部局別に運営していた為、部局連携が課題であった。
- ・子どもの支援にあたっては、医療面のみならず、福祉面からのアプローチも必要だった。

#### (2)「ちくたく」の支援内容

- ・多様な視点による適切で高度な支援の提供  
子どもの体の発達と心の成長の両面からアプローチし、より適切かつ質の高い医療、福祉支援を総合的に支援する。
- ・関係機関との連携による札幌市全体の支援体制の向上  
支援技術等をフィードバックし、札幌市全体の子どもの支援体制の向上を図る。

#### (3)組織・構成施設

- ・子ども発達支援総合センター庁舎  
子ども心身医療センター(診療所)、児童心理治療センター“こころぼ”、自閉症児童支援センター“さぼこ”(福祉型障害児入所施設)、かしわ学園、ひまわり整肢園、地域支援室

- 児童福祉総合センター  
発達医療センター、はるにれ学園
- (4) 「ちくたく」の支援対象となる子ども  
座れない、はいはいをしない、歩けない、耳の聞こえが心配、ことばの遅れ、落ち着かない、友達と関われない、不安緊張が強い、学習面でのバランスが悪いなど、運動発達から精神発達まで多くの課題が絡み合っている子どもも多い。
- (5) 各センターの運営について
- 子ども心身医療センター（診療所）  
心身の発達に遅れ、障がい疑われる子どもや、心に悩みを抱える子どもを医学的に診断し、心理療法や、精神科デイケア、リハビリテーション、保育、家族支援・相談
  - 発達医療センター（診療所）  
発達の遅れや身体の障がい疑われる子どもを医学的に診断し、治療やリハビリテーション、家族支援
  - 児童心理治療センター  
地域や家庭での生活が困難な子どもを、児童相談所の措置により一定期間預かり、入所による生活・心理支援
  - 自閉症児童支援センター  
日常生活スキル支援を提供し状況改善を図る
  - 福祉型児童発達支援センター  
単独または親子で通園し基本的な生活習慣や集団生活への適応など、遊びを通じての早期治療、また計画相談支援、保育所等訪問支援等の地域支援も行う。
  - 医療型児童発達支援センター  
親子で通園し保育やリハビリテーションなど総合的な早期療育、また計画相談支援、保育等訪問支援の地域支援も行う。

### 3、質疑

Q 外向け研修会とは？

A 札幌市各地の保健センターとつながっていて、学校機関や幼稚園などへ研修を行っている。

Q 地域支援室の役割とは？

A 初めての子どもの相談が中心になる。

Q 子どもの進路指導はどこが担当しているのか？

A 教育センターが中心で行っている。（本市と同じ）

Q 運営費はどうなっているのか？

A 札幌市費100% 国庫補助金はもらっていない。  
医療部門はコスト高のため赤字であり、市が補填している。

Q 施設での待機児童はいるのか？

A 来年3月まで診察予約は埋まっている。入所施設は3か月待ちなので、待てない人は他の民間施設を探してもらうため、事実上待機ゼロ。

Q 施設対象者はどういった方なのか？

A 当施設で守ってあげられるかが判断基準で、すべての児童生徒を受け入れられるわけではない。

Q 設置の背景は？

A もともとは成人の精神病院だったところを7年前現在の子ども用の施設に改修した。

Q 発達障害児童生徒の推移は？

A 明確な数値がないため、はっきりとした推移は不明だが増加傾向。ほとんどが乳幼児診断で指摘され、受け入れ施設を案内されてここに来る。

Q 複合施設のメリットは？

A 変化があれば医療に案内しやすい。さまざまな職種の人が交われば個々のスキルアップが期待できる。利用者にとっては、トータルな支援が受けられる。

Q どういった課題を抱えているのか。

A 児童精神科医師が不足している。採算がとれないこともあり、医師の欠員の補充が少ない。また、職員のスキルを地域でどのように生かしていくのか模索している。

Q 保護者が子どもの障害を受け入れないケースにおいてどのように対応するのか。

A 家庭への支援はセットであり、親の同意をとることは重要。

児童相談所とも連携していて、「ペアレントプログラム」もあり最終的には親元に帰すことを目標にしている。

Q 「さぼこ」のような入所施設を高校卒業後退所した後、どのように発達障害児者を支援するのか。

A 自宅へ戻ることが難しい場合は、グループホームや障害者施設へ入所する。家族関係が悪い場合は、無理に家庭に戻さずに公的な施設への入所を促進している。

#### 4、施設調査

施設内の面談室、診療室、治療施設等の説明

#### 5、所感

子どもは、その両親や家族はもちろんのこと、家族の友人や近所の住民にいたるまで、多くの人たちの希望となって生まれてきます。しかし、愛情を注ぎながら育てるうちにも、時として乳幼児健診等で発達の遅れを指摘されるケースがあります。日常生活で少し様子が気になる、うちの子どもは発達障害かも？と感じても、なかなかその現実を受け止めきれず、誰にも相談できずにいる「孤独な親」は多くいるのではないのでしょうか。

発達障害とは、発達の特性によって生活上の支障が起こることであり、生まれつき脳の特性が「落ち着きがない」「こだわりが強い」「人とかかわりが苦手」などの特徴があり、家庭に生活のしにくさが起こることになります。それらを少しでも改善するために「治療」や「リハビリテーション」「療育」などを医療・福祉の両面から支援を行う複数の施設が集まった複合施設が「ちくたく」です。

発達支援に関する行政の最大の役割の一つは、本人も含め家族の生活のしにくさを軽減することです。そしてもう一つは、子どもが家族や仲間への安心感や信頼感を持ち、主体性を持って社会生活を送れるようにすることだと考えます。

「ちくたく」では、そういった役割を分担し複合施設とすることにより、より早く、より正確な子どもへのアプローチを行っていくため運営されています。

こどもの伸びやかな成長、家族、医療、福祉の連携、子どもや家族を支える地域力の育成を目指し、それぞれの部門が協働しながら一人ひとりのこどもに対して必要な支援を検討・提供しています。

今回の「ちくたく」視察によって、学ぶべき点が多々あり、今後の伊勢原市の発達支援事業にも活かせるよう、議員の立場からも発言してまいります。

これまでも何度か発達支援センターは訪問したことがあったが、今回のちくたく（札幌市）は、質の高い医療と福祉が合体した総合的な施設であることが1番の特色であった。

近年、軽度も含めると発達障害児者は増加傾向にあり、家庭環境が要因である、虐待が疑われるなどにより複雑化している。子どもの年齢や障害の程度、家庭状況によっては通所か入所か個々によって対応が異なる。「ちくたく」は、心身・発達医療・心理支援など細かく分かれていて、専門医やリハビリ機能、福祉相談員などスタッフも充実している。恐らく幼いうちから積極的に保護者がこういった施設と関わりを持てば、比較的障害が軽く済んだり改善が見られたりするのだが、なかには子どもの障害を正面から受け入れられず、尻込みしている保護者もいる。

伊勢原市でも乳幼児健診や保育園・幼稚園などで検査を勧められても、医療機関を受診することに抵抗感を示す保護者は少なからずいる。東海大学病院などでは児童心理治療が可能だが、親にとってみれば医者から何を指摘されるのか、障害という診断を下されるかと思うと、もう少し様子を見てみようかと先延ばししたくなるかもしれない。しかし、「ちくたく」のように気軽に相談員に育児相談をした時、隣の医療機関でさらなる相談を試みたらどうかと言われれば、そこには高いハードルはなく気軽に受診できる。

こういった入所型も併設している巨大な複合施設を持てるのは、人口約200万人都市の札幌市だから可能なかもしれないが、伊勢原市のような小規模自治体では県の施設や地元の医療機関との連携をスムーズにし、総合的に発達障害に対応する必要がある。

障害者制度は、18歳を境に受けられる制度や福祉サービスががらりと異なる。保護者にしてみれば、中学高校まではなんとか来たが、そこから先が不安だ、慣れ親しんだ施設を利用することができないという声を聴く。自閉症は発達障害など急に改善することはなく、一生涯付き合っていかなければならないのが現実だ。早期発見の幼少期の支援と慢性期に入ったときでは、支援の内容も変わっていくが、最終的に自立に向けた支援がどこまで可能か検証する必要がある。「ちくたく」で育成されていった子どもたちがその後どのように成長していったかフォローできたらもっとよいのかと思った。

本市でも障がい福祉課、福祉民間施設、県、医師会などさまざまな機関と連携して、総合的に子ども一人一人をきめ細かく支援することが求められている。今回の視察を終えて、「ちくたく」のような総合施設の設置には至らなくても、情報共有を図り子どもたちに寄り添っていける体制づくりを本市で急ぐ必要があることを強く感じた。



## ○東川町 「ブランディングを活かしたまちづくり」について

### 1、視察目的

地元の風景を活かし写真を通じてどうまちづくりに活かしているのか。また、ブランディングを通して職員の意識改革にどう結び付けているのかを視察し、本市の緑豊かな資源をブランディングに活かしていく。

### 2、調査概要

議長、町長の挨拶ののち視察項目へ（正副議長、町長が視察終了まで同席）

#### (1)議長・町長挨拶・懇談の内容

風景や水、空港からの距離など、豊かな自然や地理的な環境は大きい魅力だ。

木工も盛んで全国的にも名高い旭川家具の3割を東川町で生産し、木の質感を活かしたおしゃれな外観の店が多いが、店は移住者が開くケースが多い。25店舗だった飲食店が10年間で60店舗まで増えた。

就学前教育を充実するため、構造改革特区の認定を受け幼保一元化施設「ももんがの家」を開園。中学の生徒たちが使う机や椅子は家具職人が作っている。

人口1万人未満の町は合併が迫られ、7500人の東川町の存亡の危機に陥っていた。

自立するとは何か、それは自分の頭で考えること。その一つが「写真文化首都宣言」であり、写真を軸としたまちづくり事業を活性化させた。

まちのブランディングは軌道に乗ったが人口が足りないため、応援人口を増やすため「ひがしかわ株主制度」を始めた。

こうした実行力の根底には「3つの“ない”はない」「①予算がない、②前例がない、③他でやってない」を言わないことを徹底し、主体的に考え抜くことで独自の取り組みにつながった。

#### (2)写真文化首都「写真の町」

1985年からはじまった「写真の町」が35年以上続く文化でのまちづくり

東川町が21世紀に向けて「町民が参加し後世に残し得るまちづくり」を模索した中で「写真」のまちづくりをスタート

- 写真の町宣言 1985年6月1日（写真の日） 1986年 写真の町条例制定

「自然」や「文化」そして「人と人の出会い」を大切にすること

- ① 写真映りの良い町づくり、②写真映りの良い人づくり、③写真映りの良い物づくり

1986年 写真の町条例制定（議会を通す必要があり歯止めとした）

- 写真文化首都宣言2014年3月

- イベント

東川町国際写真フェスティバル

38か国参加

写真甲子園

533校の応募 全国大会18校（3人/1校）

高校生国際交流フェスティバル

20か国参加

- 東川町文化ギャラリーオープン 1986年

写真文化発信の中心的な役割を担う

2021年に改修・増築

コレクション展示や撮影・展示・トークイベントを開催できるスタジオと、東川家具でくつろぐラウンジを新設

(3) 町の概要

人口8400人（内外国人398人） 面積247平方キロメートル  
写真の町、水が豊かな町（全戸地下水で上水道のない町）、大雪山・旭岳の町、  
お米の町（高品質ブランド米東川米、単一農協、公設民営酒造2020年誕生）、  
木工家具の町、適疎な町（ゼロカーボンに取り組む適疎な町宣言）

- ・写真文化を核にしたまちづくり
- ・上水道がなく「天然水」を生活水として暮らしている（北海道で唯一）
- ・25年にわたってゆるやかに人口が増加、自然減、社会増  
30代～40代の人口比率が高い

(4) 基幹産業としての誇りと自信 北海道屈指の米どころ

生産者とJAひがしかわが制定した独自の厳しい生産基準「東川米信頼の証10か条」と  
「水とくらす5か条」を守っている 農協出荷率95%

(5) 公設民営の酒蔵

米と水がおいしい東川町が酒造づくりを熱望し公募によって、岐阜県中津川市で創業明治  
10年143年を迎える「三千櫻」が移転した。

(6) 日本三大家具の旭川家具を創り出す「家具・クラフトの町」として発展

約30%は東川町で製作 4月14日椅子の日と制定  
生まれた子供たちに椅子を贈る「君の椅子」プロジェクト 子どもの成長を温かく見守る  
中学校で3年間使った木製の椅子を卒業時に記念として持ち帰る

(7) 世界的建築家、隈研吾氏との事業提携を推進

4棟のシェアオフィス「KAGUの家」建設

(8) 豊かな水資源を活用した飲食店やカフェのあるまちなみ

(9) 東川の景観を守り育てる

美しい東川の風景を守り育てる条例 平成14年

行政、住民、事業者が連携し、美しい風景づくりを推進する。平成17年には景観法  
に基づく景観行政団体となり、景観や環境に配慮した東川風住宅の建築を推奨  
グリーンヴィレッジ⇒庭の植栽、木材の利用、屋根の形、色、外壁、堀や囲いの制限  
等細かい規定

(10) 町民に対する支援補助

景観住宅建築支援事業、起業化支援事業（例カフェ開店100万円）、  
薪ストーブ設置補助金（上限50万円）、2世帯居住推進事業補助金

(11) ふるさと納税ではなく「ふるさと株主」という想い

東川町を応援しようとする方が、東川町への「投資」で「ひがしかわ株主」となり、共  
に町の未来を育てていくことを趣旨に取り組んでいる

(12) 未来を育む社会システムの共創をめざすオフィシャルパートナー制度

企業とパートナーシップ関係を構築し、地方や日本、世界の未来を育む社会価値の共創  
をめざす。

3、質疑

Q 地域の写真を通じてまちおこし（ブランディング）を進めた背景について

A 1985年「写真の町」宣言と共に写真によるまちづくりの歩みをはじめ、2014年写真文化と世界の人々をつなぐことを決意し「写真文化都市」を宣言したとのこと。

Q ブランディングを進めたことによる成果や課題について

A 「写真甲子園」などの日本国内に限らず、国際交流写真フェスティバルなど国際交流も行っている。

Q 「ひがしかわ株主制度」の内容について

A ふるさと納税を株主制度にしている。目的は町の応援者を増やすこと。株主証の発行、株主限定企画、株主専用宿泊施設など。企業連携「東川オフィシャルパートナー制度」は現在29社の登録がある。

Q 建築家・隈研吾氏は東川町に北海道事務所を開設、さらに今後、町の悲願である旭川家具の展示施設「デザインミュージアム」の建設構想にも協力するとあるが、どのような経緯からなのか

A コロナ禍のなか、東川町に事務所を建ててほしいとの依頼があった。デザインミュージアム構想の推進を通じてフラットな連携を行っている。

Q 人口8千人のうち約半数は移住者が占めているとのことだが移住者の割合の多い要因について

A 教育福祉、生活環境をいかにつくるかに特化して努力した。景観条例、起業家支援事業、二世帯移住推進事業補助金等、何かひとつだけ努力したわけではない。

Q 7月24日に都内で開催された「北海道移住相談会」での状況について

A 年4回参加している。1回あたり20組ほど相談者がある。

Q 残業なし、休日出勤なしといった働き方をしているという記事を拝見したが、この内容について

A 休日だから対応しないとといった対応をとらないことにしている。決してブラック企業ではない。お客様という考えを忘れずに対応しているということ。

Q 「脱公務員思考」を掲げ、職員の意識改革をどのように図っているのか。

A 特に研修等を行っているわけではないが、2年周期で人事異動を行っている。それぞれがほぼ全ての事業を把握していることが大きい。

Q 移住者の傾向は？

A 北海道内よりも道外からの移住者が増えている。首都圏からは仕事ごと来る方もいる。30代40代の方が増えている。

Q 荒廃農地がないとのことだが、どのように行ったのか？経過は？

A 農地をもっている農家が増やしていった。コメ農家が多い。東川米のブランド力で高く売れるので生活がしやすい。農業後継者が増えやすい。町主導ではなく、JA主導で町として支援してきた。国営の緊急事業（国営農地再編整備事業）を利用して大型化している。1区画2.2haにする事業。

Q 北海道では農業が基幹事業だと思うが、冬の時期はどうしているのか？

A 季節限定、雪の仕事がいろいろある。旭川空港やJR関係の除雪の仕事が多々ある。夏の間は1年間の仕事をする。

Q 写真を通じたイベントについて、職員は大変ではないのか。通常の市民サービスの他に仕事が多いのではないのか。

A 写真の町課では8人のスタッフでやっている。無償ボランティアの人も多くいる。仕事

は大変だがやりがいはある。写真甲子園では各課から2人10日間かわる。

Q 企業誘致に1億円かけていると聞く、徴税9億円の中で、多くのパーセントと考えるがどうか。

A 企業版ふるさと納税の財源や企業の支援で行っている。

歳入と歳出が循環となっているので持ち出しは少ない。

Q 鳥獣被害はあるのか

A 熊の出没情報が出ている。鹿、あらいくま等の被害も出ている。

Q 議会の東川に対する見解は？追隨しているのか。

A 国の政策、人街プラン、海外とのつきあい、いろいろな事業との紐づけに時間がない。

丁寧な議論を行うが全員協議会で行う。付託している時間はない。スピードが大事。

#### 4、施設調査

サテライトオフィス「KAGUの家」(隈研吾設計)

文化ギャラリー

せんとぴゅあⅠ(日本語学校)、せんとぴゅあⅡ(複合交流施設)

#### 5、所感

東川町は人口8,000人の小さな町でその半数が移住者という。豊かな自然と文化、子育てしやすい環境、景観を守る取り組みなどが住みやすさにつながっていると感じた。

もともとは「これからの時代、がんばっても定住人口が大きく増えることはない。住んでいる人だけではなく、応援してくれる人も住人にすればいい」という考えのもと、「ひがしかわ株主制度」を始めたとのこと。今では2万3000人の株主が存在するビッグな制度となっています。まさにアイデアの勝利だと感心させられました。

また、写真の町をブランディングするにあたって、国からのメニューを大臣クラスの国会議員等から町長自ら情報を集め、補助金等を入れる仕組み作りが秀逸と感じました。

本市が学ぶべき点は、国や県からのメニューを押し付けと考えるのではなく、積極的に取りに行く。損して得取れではないが、最初は赤字となる分野でも、長い目で見れば行政の歳入確保につながるのと、先を見越したメニューを取りに行くべきだと感じます。東川町の写真の美術館はまさに典型的な例でした。

東川町の農業の中心にあるのは「米」食味ランキングで「得A」を獲得しています。農業で生活していける農家が多く後継者に困ることはない。

荒廃農地がゼロという特筆すべき農業を行っています。その背景には、農家の努力と環境が、絶妙にマッチした部分とブランディングにあると考えます。それはこれまでの成功の積み重ねであり、農家と行政、両者の努力の結晶であると感じました。

ブランドはこのようにつくられるものだと、あらためて勉強させて頂きました。

東川町を代表する分譲地「グリーンヴィレッジ」では、大雪山の山並みと調和する屋根の色や形、壁の色、住宅の高さや配置、緑地率を定めています。また、景観条例で建築緑化協定を定めており、ルールにそった住宅をつくることでブランド化し価値の創造につながっています。

前例のない事業を次々成功させてきた東川町。外部コンサルに丸投げしない姿勢に、他の自治体との違いを感じました。

町長を先頭に職員自ら考えを実行に移す姿勢に感銘を受けざるを得ません。こうした根底

には、「予算がない」「前例がない」「他でやってない」といった、「自治体あるある」を言わないルールにあるとのこと。こうした考えが独自の事業を成功させる礎になっているのだと確信しました。

東川町から伊勢原市が学ぶべき点が非常に多い、というより学ぶ点しかない。

とても歯がゆくなぜか悔しさが残る視察でもあった。なぜ9000人規模の町で国際・国内事業の展開、文化ギャラリーや複合交流施設、38億円の小学校、休耕地無など、政策推進の考え方やマネジメントを変えるだけでは達成は難しいと考えるが東川町は実践できています。

正副議長、町長自ら視察に同席し、何か得るものはないかと自らメモを取っていましたし、質問に対し正副議長や町長が、自らの言葉で答える姿勢に「形・前例」は関係なく「すべては東川町で暮らす人々のために」を実践していると感じました。

今後我々の議会活動にどう活かしていくのかは、私たちの基本的スタンスの変革から進める必要があるのではないのでしょうか。生き残りをかけ必死に取り組んでいる東川町の姿勢を参考に、一つでも実践するよう活動してまいります。

「ブランディングを活かしたまちづくり」の調査研究が目的で、初めて東川町を訪問した。人口約8500人のうち、半数以上が移住者で占めており、この20年で2割も人口が増加している。なぜ人口減少に転じている自治体が多い中で北海道の小さな町が人口増に成功しているのか、その秘訣を見出そうとわくわくした気持ちで視察に臨んだ。そして、その期待は裏切ることがなかった。

町役場には、町長をはじめ正副議長、伊勢原市出身の町議会議員、議会事務局長たちが出迎えてくれ、最後まで我々に付き合ってくれた。なので、意見交換の時間も真剣そのもの、つつい時間オーバーとなってしまいうくらいの有意義な時間だった。

町長の冒頭のご挨拶の中で、「3つのないはない、つまり予算がない、前例がない、他でやっていないは言うてはならない」ということを常々おっしゃられていると話していた。また、東川町は東京を意識していて、東京都との距離を心理的にも物理的にも縮めようとしている。確かに、千歳空港まで車で数十分、飛行機だと1.5時間で東京に到着することを考えれば、2時間程度で東京にアクセス可能だ。旭川市とは隣接していて仕事は旭川市、住まいは水事情がよく自然豊かな東川町と思う気持ちも理解する。上水道がなくすべて地下水で毎日良質な最高級の水が飲めることは、ミネラルウォーターを買って生活している都会人からみれば、最高の贅沢かもしれない。転入者の7割は北海道内ということも大いに納得できる。

1985年から徹底して進めてきた写真文化首都によるまちづくりは、35年以上続き様々な交流人口を増やしてきた。写真甲子園や高校生国際交流写真フェスティバルなどのイベントにより、高校生が東川町を身近に感じ、若者たちが東川町を訪れるきっかけとなる。東川町文化ギャラリーも案内されたが、すばらしい施設でまさに文化を誇る町という印象を持った。これが町立文化施設だというから驚きだ。

また、町の産業として木工家具が盛んであり、特に椅子に力を入れている。人々の暮らしのなかに、「椅子」が文化として根付いているのはすばらしい。隈研吾氏と東川町が共同で進めているプロジェクトも非常に話題性もあり期待が持てる。資料としていただいた「椅子」のタイトル6冊は、改めてじっくり読んでみたい。

移住者が多いのは複合的な要素があるが、そのうちの1つに「脱公務員思考」が間違いな

くある。視察から戻って驚いたのは、東川町職員2名からお礼のメールが、私の名刺のアドレスに送られていた。これまで名刺交換をしても特にその後連絡が来ることはなかったため、今回わざわざ私個人に対してお礼メールを送っていただいたことには大変驚いた。東川町は、移住者からの問い合わせには、土日祝日関係なく職員は対応するようだ。そういった職員の真剣な対応に心揺さぶられて、東川町に住んでみようと思決意する。伊勢原市出身の鈴木町議会議員が紆余曲折して東川町に定住することとした経験談も非常に納得のいくものだった。

本市も移住者を増やして人口増を目指したいところだが、どうやったら移住者が増えるのか具体的な政策はない。住宅を安く提供して移住者を増やそうとして失敗に終わった自治体も県内にある。小手先で一時的な魅力を作っても本当に定住したい人を呼び込むことにはならない。やはり、トータルでその町の魅力を高めて移住者を増やす努力を地道に続けなければ難しい。

今回は、東川町をゆっくり視察する時間は持てなかったが、次回はぜひ移住者が経営しているおしゃれなカフェ、レストランを回りながら、手作り椅子でおいしいコーヒーを堪能して心の洗濯をしたいと感じた。10年後、20年後ますますこの町が発展していることを祈りつつも伊勢原市も魅力アップを図り質も量も伴ったまちづくりに取り組んでいきたい。



## ○石狩市 「道の駅あいろーど厚田について」

### 1、視察目的

魅力ある道の駅を視察し、道の駅開業までの基本的考え方やコンセプト、現在の運営方法について学び、当市で進めている伊勢原大山インター周辺の土地利用区域内に、観光拠点となる施設整備を推進するための参考とする。

### 2、調査概要（石狩市役所厚田支所）

#### (1)市の紹介ビデオ視聴

1市2村が合併

#### (2)あいろーど厚田の由来

石狩市の「I」と旧厚田村に吹く幸せを運ぶ風「あい風」、浜益の愛冠岬の「あい」この3つを繋ぐ国道231号線を「あいろーど」と呼び、設置した地域の地名「厚田」を入れた。

(3) 施設の特徴 3階建て

- 1階：24時間トイレ、飲食スペース、地場産品販売所、レンタサイクル貸出
- 2階：ガラス張りの飲食スペース、展示スペース（厚田の偉人紹介）
- 3階：地域コミュニティ室、展望テラス（石狩湾が一望でき対岸の小樽市も見える）

(4) 隣接施設

- 3カ所の駐車場に加え子供広場、石積スタンド様々なイベントを開催できる広場
- 厚田公園展望台「恋人の聖地」
- ソーラーパネルと余った電気で水素をつくり、水素から電気を発電するシステム（国の試験運用）

(5) 課題について

- 入込客数と売上げが4月から10月に偏り、吹雪がひどい冬の営業でどのように稼ぐかが課題
- 運営は第三セクター（市100%出資）

3、質疑

Q 輪島市の名産品を販売しているが、

- A 地域の住民の方に友好都市を認知していただく目的もあった。  
逆にこちらからもサクランボなどを持っていくと大変好評いただけている。  
物産交流としての意味合いから広がればと願っている。

Q 株式会社あい風の運営について

- A 市が100%出資した第3セクター（民間企業からの手は上がらなかった）  
5000万円程度の運営資金として指定管理として支出している。

Q 成果と課題について

- A 成果はまだまだ見えていない  
課題 冬場の入込客数を増やしたい  
3階構造にしたので面積はあるものの、売店面積が狭い。余裕のある設計が必要。  
この時代だからこそ、ゆったりしたスペースが欲しかった。

Q 魅力の優先順位

- A 道内の道の駅のアンケート調査から、夕日がきれい・景観がきれいと評価されている。  
評価いただけるものを盛り込んでいただくことは大事。食事やお土産などに繋げていくことが大事。

Q 地元との関係について

- A 地元の家具屋が制作した椅子などを使用したカフェテリアを作った。  
地元の事業者とさらにつながって、来場者に喜んでいただける仕組みを始めた。

Q 恋人の聖地とは

- A 開業前に恋人の聖地を売り込んでいた。開業に当たり含めて活用した。  
旧厚田村公園内の展望施設だった。

Q 若者を取り込む工夫

- A 近くを回遊していただくためにレンタサイクルを準備している。  
雪の中でも走れるファットバイク。  
サイクリングのお客様が多いため、サイクルラック、空気入れ設置、チューブ販売もしている。サイクリストのためのちょっとした配慮をしている。特徴的な自転車を置くこ

とで来訪目的にもなっている。

Q 防災拠点としての機能

A 指定避難所は隣の小学校。国としての防災拠点としての位置づけとして駐車場にマンホールトイレ貯水槽から水が備蓄品を国から支給。

水素からの給電事業、蓄電池により3日程度利用できる。

地元の方の避難というよりは通行人への準備提供という考え方。

Q 職員は

A 正職員4人アルバイトが5から6人、シフトを組んでいる

Q どのような人を呼び込みたい

A 観光客 まずは交流人口の拡大を目指した。

個人客をターゲットにこだわりのある施策を実施。

4、現地調査

道の駅あいろーど厚田の現地調査（駅長の説明）

厚田公園展望台

5、所感

日本で初めて缶詰がつくられた石狩、自作のプロモーションビデオを拝聴しながら具体的な説明を受け、石狩市の特徴が理解できるわかりやすい内容でした。本市でも取り入れたら理解が早まるのではと感じました。

石狩市は1市2村が合併した街で南北に70kmと縦長な地域となっています。地域活性化のために、複合施設の施設整備検討に入ったことが「道の駅」のきっかけで、重点「道の駅」ということもあり、国からの支援も大きかったようです。

行政の判断とスピードが必要だと考えました。

道の駅には資料館がありますが、もともとあった資料館のものをそのまま活かしています。本市でも多くの歴史的文化財を抱えており、「道の駅」建設に文化財資料館的思考を取り入れて考えれば、設置目的の幅が広がり判断に困らないのではないのでしょうか。

地域の方と話し合いながら、道の駅に必要なものは何か？を検討したとのことであり、地域住民のニーズ調査も必要だと感じました。

道の駅で3階建てはここしかなく、傾斜地を利用し建設したことで石狩湾や対岸の小樽市を一望できる見晴らしは素晴らしく、夕日売りにはしているとのことでしたが、課題の中で説明されていた物産展などの商業スペースの狭さはやはり気になりました。

入り込み客数はH30初年度612,702人。経営計画では、年間40万人を見込んでいますが、コロナの影響により赤字の年もあるとのこと。冬場の来館者が吹雪により極端に少なくなり、SNSの活用などに力を入れ運営をさせる努力が必要と説明を受けましたが、北海道ならではの冬場の知恵が必要なことは、地方が抱える環境を意識し事前準備の必要性を感じました。

また、隣接場所に国指定のソーラーによる電気から水素をつくり、水素から電気を発電する施設と蓄電施設を併用しており、観光客・国道利用者の避難場所としての機能も有しています。

地場産（六次産業）の物産、資料館、防災拠点、観光拠点、レンタサイクル拠点など多くの役割を設定することで、市の重要拠点としてのニーズが高まるものと考えます。

伊勢原市にもぜひ観光の拠点となる道の駅を、というのは会派の長年の願いである。今回、複合施設として話題を集めている道の駅が厚田にあるということで、視察することとなった。

市庁舎での説明の後、早速市職員たちが現地へ案内してくれた。まずは、3階建ての道の駅、そして厚田公園展望台の恋人の聖地を丁寧に説明していただいた。

3階の展望フロアとデッキは、夕日の名所ということで素晴らしい眺望である。日本海を眺めながら、ゆったりとした時間を過ごすことができるよう設計されている。2階は、厚田の歴史を学べる展示コーナーとなっており、初めて訪れた人も郷土を学べるように展示されている。おしゃれなグルメショップもあって、若者中心に喜べる内容となっていた。そして、今回一番収益を稼ぐと思われる地場産品販売コーナーだが、説明どおり狭くてこれでは売り上げがあがらないし多種多様な商品を陳列できないと感じた。3階建てなのになぜもっと物品の面積をとらなかったのか、行政がやっていることもあって儲けようという意識が低いのではないだろうか。コロナ前に建設したにしても売店の通路や空間がもっと必要であったし、小売り専門業者に部分委託して設計すればよかったのではないかと思った。

しかしながら、総合的に見ると防災機能を備え、恋人たちのデートスポットになっており、写真スポットもたくさんあるハイセンスな道の駅という印象をもった。

一番の課題は、冬季の閑散期どうやって凌いでいくのか、落ち込んだ観光客をどう確保するのか、年間を通しての取り組みが必要だし、持続可能な施設にするためにも赤字は防ぎたい。今後長期的には、個人観光客が増え、自由に北海道を周遊している人が休憩所として、あいろんど厚田のような道の駅を利用するのではないだろうか。そのためには、道内無数の道の駅があるなかで、他施設との差別化を図りリピーター客を増やす必要がある。商品もマンネリ化していると、お客に飽きられて入込客数が増えていかない。アフターコロナにおいては、外国人観光客にも足を運んでもらえるような特色ある施設運営が必要だ。イベントなども定期的で開催して、積極的にPRすることにより、遠方からも来てもらえる可能性がある。

本市でも新東名インター周辺にぜひ道の駅を建設し、本市の魅力を凝縮した複合的なサービスを考える必要がある。遺跡も含めた文化財、歴史や郷土を市内外に広く知ってもらい、地場産の野菜や果物、米を販売し農家を勇気づける、そして地元の人々が集えるコミュニティ要素も盛り込む。できれば、湘南海岸が見渡せる展望台もあると、若者や恋人たちが自然と集る、そういった道の駅設置を引き続き目指していきたい。

